

ピア・サポートを通じて解消された不本意入学という「生きづらさ」

著者：高口僚太郎¹・菊地創²・鈴木達也¹・大岡美穂¹・茂田井利容¹・木澤弘¹・
永森正仁¹・草間恵子¹・高橋薫¹・石川千佳子³・番園寛也³・山科満³

所属：1 長岡技術科学大学・2 愛知県立大学・3 中央大学

英文タイトル：Peer support activities helped resolve the "difficulty of life" caused by involuntary enrollment

英文著者名：Ryotaro KOGUCHI, Sou KIKUCHI, Tatsuya SUZUKI, Miho OHOKA, Riyo MOTAI, Hiroshi KIZAWA, Masahito NAGAMORI, Keiko KUSAMA, Kaoru TAKAHASHI, Chikako ISHIWAKA, Hiroya BANZONO and Mitsuru YAMASHINA

英文所属：1 Nagaoka University of Technology 2 Aichi Prefectural University
3 Chuo University

要旨：

本稿は、大学でピア・サポートを継続している大学生への半構造化面接調査から、「不本意入学」をした自分自身と向き合い、そのうえで自己を受容していく過程においてピア・サポートが寄与していたことを明らかにしている。当該学生であるAさんは、入学当初から「自身は大学に不本意入学した」と語っていたが、ピア・サポート活動を継続する過程で「不本意入学」と語る自身の背景には「母親」の存在が大きく作用していることに気づき、「母親」と「不本意入学」のとらえ直しをおこなうようになっていく。当該学生はピア・サポートを通して出会うさまざまな学生たちとの関わり合いのなかで「母親」と「不本意入学」のとらえ直しをおこない、このことで徐々に自分自身を受け容れながらすごし、成長していく。

キーワード：経験の語り 不本意入学 自己受容 母-息子関係 生きづらさ

1. 問題の所在

近年、大学における学生支援の一環としてのピア・サポートへの注目が著しい。日本ピア・サポート学会は「ピア・サポートの定義」として、「学生たちの対人関係能力や自己表現等、社会に生きる力がきわめて不足している現状を改善するための学習教育活動の一環として、教職員の指導・援助のもとに、学生たち相互の人間関係を豊かにするための学習の場を各学校の実態に応じて設定し、そこで得た知識やスキル（技術）をもとに、仲間を思いやり、支える実践活動を、ピア・サポートと呼ぶ」としている¹。

日本学生支援機構（JASSO）も大学におけるピア・サポートの実施について経年的に調査している²。最新となる2023年度の調査データによると、大学でのピア・サポートの取り組み状況は50.9%と、半数以上もの大学で取り組まれていることがわかる。

ピア・サポートに関わりたい、参加したいと期待や不安を抱えながらやってくる大学生に向き合う教職員は、学生自身のこれまでの経験や学生の訴えを聴く。学生たち自身の期待や不安は、「大学生」というこれまでとは異なる新たな環境によってもたらされているだろう。そこには、「大学生」という人生の新たなステップに入ったことによる期待と、学生生活をスムーズに送ることができるだろうかという不安など、さまざまな感情が入り混じっていると思われる。ただし、学生たちが抱える不安は、必ずしも彼ら自身が明確に意識していたり、語られたりしているわけではないがゆえに、教職員にとっては彼らの思いを明確にとらえることが難しいと考えられる。とはいえ、そうした明確に語られたり、意識することの少ない思いこそ、実は学生たち自身の実存にかかわる問題としてとらえる必要があるのではないだろうか。この思いに光を当てるためには、当事者の語りに寄り添い、理解しつつ、その上で語りの背景に孕む事項も注視するようなミクロ的な手法を用いることが必要ではないかと考える。

2. 分析視角（本研究の目的）

冒頭に述べたように、近年、全国の大学においてピア・サポートが取り組まれていることで「共に生きる」という土壌が育まれていることにより、学生たちが比較的スムーズに新しい学生生活を営む環境は整えられている。しかしそのぶん、学生たちが抱える内心の思いは顕在化されにくくなってもおり、このことが明確に語られたり、意識されることが少ないといえよう。

逆説的にいえば、学生たちが抱える内心の思いは、「共に生きる」環境が整えられていることで生じている。すると学生たちは、環境が整えられているにもかかわらず、明確に語ることもできず、意識することも難しい内心の思いを募らせているという、自己責任の文脈で自分自身をとらえてしまうようになる。そして自己責任の文脈でとらえられた内心の思いは、彼らにとって学生生活を送るうえでのつらさとしてあらわれてくるのである。

明示的ではないつらさを抱えながら、一方でピア・サポートを継続している大学生を

対象とした研究は管見の限りあまり多く存在していないように思われる。ただし、つらさを抱えながらも自己肯定感の向上を目指す大学生を対象とした研究に、吉森丹衣子の研究があげられる³。吉森は、大学生にはある種のつらさがあることを前提にしながら、大学生の日常における自己肯定感のゆらぎを対人関係の影響の観点から心理学的尺度を用いて横断的に記述している。そして、対人関係の増減、関わる人々との共通項の有無などと大学生の自己肯定感の向上とが一定の相関を示すものとしながら、自己肯定感の低下、すなわち、つらさを乗り越えることができるのではないかととらえている。

たしかに、大学生の日常を横断的に、「場面」でとらえたときには、つらさに折り合いをつけながら大学生が日常をすごしている様子としてみることは可能と思われる。他方で、時間的経過をとまなう縦断研究として、大学生の日常を記述したさいには、異なる知見が得られるのではないかと考えられる。吉森の研究は、大学生の自己肯定感の向上にはどのような方法が効果的であるかというような横断研究であるため、時間的経過という縦断的視点を取り入れた観点からの考察はくわえられてはいない。縦断研究の手法と視点とをくわえることで、吉森の視点からではとらえることのできない大学生のリアリティに接近することができるのではないかと考える。

大学生の抱えるつらさは、学生生活に起因するつらさだけではないだろう。もちろん、学生生活に起因するつらさ、例えば、「単位取得状況が芳しくない」「友人関係をうまく構築することができない」というような場合もあろう。しかし、こうしたつらさは、そもそも何に誘発されているのかというような、学生たちの日常を立体的にとらえていくことも重要ではなかろうか。

例えば、入学時に不本意感を持っている大学生を対象とした佐藤進らの研究が挙げられる⁴。佐藤らの研究は、不本意入学と感じている大学生は、それに起因して単位取得への眼差しも低下し、学業全体へのつまずき感へとつながることを明らかにしている。つまずきは、学生生活を送ることにたいする感情にネガティブな影響を及ぼし、学生たちのつらさを構成する要因となっていくものである。佐藤らの研究から、不本意入学に起因するつらさを感じている大学生は一定数存在していることがわかるだろう。

本研究でも不本意入学に視点を当てる。そのさい、佐藤らの研究が不本意入学とつまずきとの相関関係およびそうした学生の特徴の類型化に成功していることを踏まえ、本研究では不本意入学に起因するつらさを感じている大学生を縦の軸でとらえることで差異化をはかりたいと考えている。

また、学生生活を送ることにたいする感情において、ネガティブな影響を及ぼす要因には親子関係も含まれている。山上翔平の研究は、親子関係が大学適応感に及ぼす影響について、量的調査の手法を用いて、特に青年期の親子関係の観点から考察がくわえられている⁵。山上は、父親と母親から受ける影響の差異と大学生の性別に着目したうえで、大学生の認知する高校生の時期の両親との信頼関係と心理的分離が現在の大学適応感に影響を及ぼすという仮説を検討している。山上によれば、男子学生・女子学生ともに父

親との信頼関係は大学適応感を高めること、心理的分離を阻害することが示されている。一方で、女子学生については、母親との信頼関係および心理的分離が大学適応感を高めることが示されているものの、男子学生と母親との関係性についての言及はなされていない。

親子関係が大学適応感に及ぼす影響を明らかにする量的研究において、山上の研究は一定の成果を上げているといえよう。ただ、そうした山上の研究であっても、母親と息子との関係性に言及し、なおかつ、母-息子関係が現在の大学生生活にどのような影響を及ぼしているのかについて明示的に示すことは難しかったものと推察される。そこで本研究では、山上の研究を踏襲し、母-息子関係に言及したい。そのさい、量的調査の手法からでは明らかにすることができなかったことを鑑み、質的かつ縦断的研究として分析し、考察をくわえていく点において本研究の意義が見出されるのではないかと考えている。

母親と息子の関係性について、フェミニズムの視点から考察がくわえられているのが窪田容子の研究である⁶。窪田によれば、母親の過剰な依存誘導や、「母親への脱同一化」の困難などを指摘し、こうした困難を解消するには、父親の主体的な関与や、母親が父-息子関係形成を促すこと、そして教育の場においてで息子が弱みを見せたり、共感を求めることを肯定するといった環境整備が必要だと述べている。

窪田の研究は、母-息子関係を父親の主体的な介入や、学校現場での環境調整といった、いうなれば、家庭や社会の問題として位置づけている点において鋭い指摘である。一方で、当事者である息子本人が、どのような経験あるいは出会いのなかで自己を受容し母との関係性を改善していったのかという点において、ここで縦断研究の視点をくわえることでより立体的な記述へと発展させることができるのではないかと考えている。

つらさを「語る」行為に関する研究としては、伊藤智樹の研究が挙げられる⁷。伊藤は、神経難病と吃音のセルフ・ヘルプ・グループでの参与観察を通して、患者として日常を生きる経験をする人々が自己物語の語り手になることの意味と重要性について社会学的視点から考察をくわえている。そこでは、アーサー・W・フランクの「回復の物語」概念に基づきながら分析が加えられている⁸。「回復の物語」とは、いわば、「そうなる以前の生活に戻れないか」と思考してしまう語りのことである。例えば、「病気になる以前の生活のように治らないだろうか」というような語りのことである。

ここで伊藤は、患者が自己物語の語り手になるためには、いかにして「回復の物語」と距離をとり、それとは別の物語を手に入れるかという点を指摘している。

これらの先行研究を踏まえつつ、では、どのような分析視角を用いれば、本稿が対象とする大学生のAさんの語りを読み解いていくことができるだろうか。本稿では井上俊の視角を援用する⁹。

井上は、人間の生きる過程で生じる経験や出来事は、「物語」という形式によって記述され説明されるとする。井上によれば「物語」とは、「現実あるいは架空の出来事や事態

を時間的順序および因果関係に従って一定のまとまりをもって叙情したものである」としている。さらに井上は、「人間の生きる過程があって、人生の物語があるのではなく、むしろ、自分の人生をも他者の人生をも、物語として理解し、構成し、意味づけ、自分自身と他者たちとにその物語を語る、あるいは語りながら理解し、構成し、意味づけていくとするものである」と続けている。

他者との関わり合いのなかで語り直され、構築される人生を「物語」と説明する井上のこの指摘は、つらさを抱えながらも大学でのピア・サポートを継続している大学生の A さんの語りをみていくさいにも有効である。

そこで、本研究では、大学でピア・サポートを続ける大学生の A さんの抱えるつらさが、ピア・サポートと通じて出会う他者（他の大学生）との関わり合いのなかでどのようにとらえ直され変容しながらかたちづくられ受容されていくのかを、A さんの語りを通して明らかにすることを目的とする。「不本意入学」と語る A さんの事例を通してこれに接近してゆく。

3. 対象と方法

対象は、B 大学に通う大学 2 年生の学生 A さんである（学年は、第 1 回の面接調査当時のものである）。A さんは、ピア・サポーターとして活動している学生にたいして研究協力の募集を出し、自由意志で応じた。

A さんは、中部地方内でもかなりの上位に位置する国立大学である Z 大学の附属高校の出身である。現在は、Z 大学ではなく B 大学の工学部に在籍している。また A さんは、国立 Z 大学の附属高校に在籍していた当時からピア・サポートに取り組んでいた活動経験を有している。

3. 1. 面接調査の日時と方法

面接調査は、201X 年 11 月から 5 年間にわたり、6 か月に 1 回定期に実施し、くわえて、A さんからの申し出がある場合にも聴き取りを実施し、合計 16 回実施した。面接調査の手法は、半構造化面接法を採り、現在の自分を終着点として、過去の出来事あるいは取り組みを振り返るかたちで本人に語ってもらった。著者が面接者となり、1 回あたり 60 分から 90 分実施した。

半構造化面接法の強みとしては、一定の方向性を保ちつつも、被面接者の語りによって情報が得ることができる点である。ただ、場合によっては意図しないかたちで内容が構造化することもある。今回の事例でも、面接者の意図しないかたちで、被面接者がかなり構造的に語った部分が見られた。本稿は、そうした構造的な語りを生かし、整理することで、大学でつらさを抱えながらもピア・サポートを継続している学生 A さんの変化について検討した。

4. 研究倫理

本研究は、筆者が在職していた●●大学の倫理委員会を通して（審査管理番号：2021-006）。また、面接調査においては、あらかじめ調査対象者にたいして、聴き取りの目的や意図を説明し、レコーダーによる録音許可とメモによる記録の許可を取っている。対象者から要請があれば、無条件で聴き取りのデータの使用をとり止め、あるいは削除することを書面にて明示している。

研究成果が公表されることについても了承を得ている。公表に際して、人名の扱いには特に注意し、すべて匿名表記とした。

録音データやトランスクリプト、メモについては、筆者のみが扱い、厳重に保管し、その保管場所は公言しない。

5. B大学ピア・サポート団体

B大学ピア・サポート団体は、2018年に複数人の学生たちによって主体的に設立された団体である。学生たちの所属学部も、教育学部、工学部、人文社会科学系学部、自然科学系学部とさまざまである。また、団体に所属する学生たちの性差は1:1である。主な活動内容は、学生相談箱を設置し1週間に1回中身を確認して投函した当該学生の相談を聴き、場合によっては教職員や保健管理センターに同行すること、前期と後期に履修相談を受けること、学年や学部学科を越えた学生同士の交流の場を企画・運営すること、などである。

6. Aさんの語り

Aさん（当時大学2年生）は、第1回目の面接調査のとき「不本意入学をしてきた」と語った学生である。

先生（筆者）には言っておきたいんですけど、僕、不本意入学なんですね。（筆者「え、そうなの？本当はどこ行きたかったの？」）Z大です。というか、僕、Z大の附属高校の出身で、だけど今うち（B大学）にきたんですね。…それで、母親から「せめてB大で人の役に立つことしろ」って泣きながら言われて、（筆者「泣きながら？」）はい、僕がZ大に行かなかったからですね、たぶん、泣いてたのは。それが結構つらかったりもして、それで、高校のときにちょっとだけ参加してたピアサポ（「ピア・サポート」をAさんが略して表現している。）やろうかなって思ったんです。

先述したように、Aさんは、中部地方内でもかなりの上位に位置する国立大学の附属高校の出身である。現在は、B大学の工学部に在籍しており、基盤環境整備や土木、特に橋の構造およびその設計にかんする分野に関心をもっている。将来の仕事としてピ

ア・サポートにかかわるようなことをしたいというよりは、「大学生のときにしかできないこと」と位置づけてピア・サポートを継続している。

Aさんが大学でもピア・サポートを継続しようと思ったのは、母親から「Z大に行けなかったのだから、せめて人の役に立つことをしろ」と言われた「つらさ」からであった。積極的な動機づけとは言い難いが、それでもAさんが人助けとしてピア・サポートを始めようと思ったのはなぜだろうか。Aさんは次のように語る。

まず、ピアサポと思ったのは、母親が絶対に知らないから、あれこれ言われな
いと思ったんですね（笑）。あと、少し、高尚なことをやりたくて。「共に生きる」を
モットーにしているピアサポをやって、「高尚なこと」って何だよって感じでもあ
るのですが。まあ、確かに人の役に立つことはやりたいと思っていたし、それが学
内の誰かの役に立っていると思うと、それはそれで意味があると思ったからです
ね。明確に「誰かを助ける」ってよりかは、「みんなのために」みたいな、基盤整備
とかインフラ的ところがピアサポにはあると思ってまして。「それ僕の研究テー
マでもあるやん」と思って。土木とか、橋（の建設）とか、そんな研究テーマ選
ぶ僕の性格にも合ってるように思ったんですよ。

ピア・サポートと自身の研究テーマとの親和性に気づいたAさんは、では実際にどの
ような活動に注力していたのだろうか。

高校でもやりましたが、やっぱり「傾聴的態度」を大切に？心がけて、で、
（B大学団体に）相談に来る人たちが「何に困っているか」「どう手伝ってほしいか」
みたいなことを聴くところからだなと思いました。傾聴的態度って、言葉だと当
たり前と言えば当たり前じゃないですか。ただこれをスキルとして身につけるとな
ると、できる人ってかなり限られてくると思うんですよ。…（筆者「で、実際に
どうだったの？」）全然うまくいかなかったですね（笑）（筆者「うまくいかなか
ったのか（笑）」）全然うまくいかなかったです、「あー、やっぱ先生すげーなー」と
思いました。（筆者「でも今もピアサポを続けてるじゃない？それは聴き方とかに慣
れてきたからってことですか？」）いや、それもありませんけど、どっちかって
言ったら「聴く項目を限定した」というか、そんなに誰でもは助けられないと思
ったんです。変な意味じゃなくて、それは心理学の先生とか、教育学の先生とか
だと、相談者の言っていることに傾聴して、ありとあらゆる悩み事に対応でき
ると思うんですけど、僕はそういうことはできないし、相談者もそれを僕には
望んでいないかなと思った、ですかね。

Aさんは傾聴を心がけ、そして相談にきた他の学生たちの困りごと、支援してほ
しい

こととは何かを理解しようとしたという。しかし実際にはうまくいかなかったことを踏まえ、「聴く項目を限定」することで自身の傾聴スキルをアップさせようとしたのである。では、「聴く項目を限定した」とはどういうことだろうか。Aさんは続ける。

（筆者「聴く項目を限定した」ってところをもう少し聞いてみたいのだけど）限定したというと、偉そうですね。自分の「身の丈に合ったことを聴こう」という、そういうニュアンスですかね。（筆者「例えば？」）僕、以前にも言いましたけど、不本意入学なんですね。それで、実は不本意入学の学生って結構いるんじゃないかと思って、というか実際結構いるんですよ不本意入学。それで、「俺も不本意入学だよ」とか言うと結構話が弾むというか、オープンにしたぶん、自己開示したぶん。

Aさんは、自身が「不本意入学」であることを開示することで、いうなれば「不本意入学担当者」として自身の活動を継続するようになっていったのである。その後、2年間ほどは「不本意入学担当者」として活動してきた。そのことで、このことが、Aさんにとってピア・サポートを継続するうえでの「重要な役割」になっていったばかりではなく「大学生になってからの一番の気づき」にもつながったと表現している。第3回目の面接調査（第1回目から約1年後）でAさんは次のように語っている。

その、不本意入学担当者になって、みんな（他の学生たち）の話をたくさん聞いたんですね。傾聴ができないから、どうにかもがいて手に入れた「不本意入学担当者」だったから、それなりに真剣に取り組んだ自負もあるし、件数もかなり多いと思います。…例えば、2浪しても医学部（医学科）に合格できなくて工学部に来たとか、それはそれで工学部に失礼なんですけど（笑）。（センター試験の）前期日程でダメで、うち（B大学）に来たとか、本当は工学部に行きたかったけど「女子だから止めといたら」と親に言われて（教育学部の）技術課程に入ったとか、女子だから医者じゃなくて看護師という人もいました。…病気？障害があって、親の送り迎えができる大学、で、うち（B大学）とか。それで、「あ、僕、不本意入学じゃないな」と思ったんです。これは僕にとって、たぶん大学生になってからの一番の気づきだと思います。

Aさんはさらに続ける。

（筆者「え、「不本意入学です自分」って言ってたじゃん」）はい、言いましたね。確かに言いましたし、本当にそう思ってもいました。でも僕は、そのこと（不本意入学のこと）で、誰かに相談したことはなかったし、仮にピアサポが僕より先に誰かがやってたとしても、どうですかね、相談することもなかったと思うし。「本物の

不本意入学の人」みたいな親への愚痴みたいなのも、そこまでではないんですね。…僕は、母が泣きながらとか、Z大附属（高校）だったからということだけで、「不本意入学」と思い込んでいたんです。（筆者「思い込みなの？」）はい、思い込もうとしていたんですかね、正確には。B大に志望校格下げしたと思って母が泣いているのを見て、喜ばれない合格もあると知って。…だけどピアサポやってるうちに、（相談者であるところの他の学生の）話を聴くなかで、「あれ？」と思うようになってしまって、「僕は本物の不本意入学じゃないな」って。あれ、失礼なこと言ってますかね？で、不本意じゃなくて、橋（の研究）やるなら（学ぶなら）B大だよなって決めたのは自分だし、（高校時代のクラス）担任とも話し合ったしなあって。

Aさんは、自分自身が「不本意入学ではないのではないか」という気づきを、ピア・サポートを通じてさまざまな学生たちとの関わり合いのなかで得ていった。そして、「不本意入学担当者」として「本物の不本意入学の人」と接するなかで、自身がなぜ不本意入学を考えるようになったのかについても思考するようになっていったのである。このことで、Z大学の附属高校出身であるにもかかわらずB大学に進学していること、その様子をみた「母が泣いていたこと」をAさん自身がみて不本意入学だと「思い込もうとしていた」というとらえをするようになっていく。

ここで注目したいのは、Aさんの語りのなかに登場する「母」の存在のとらえも変化していることである。Aさんは、母親からB大学に進学するのであれば「せめて人の役に立つことをしろ」といわれたことで、高校時代に少し学んでいたピア・サポートをはじめた。つまり、ピア・サポートをはじめるとききっかけにしても、不本意入学と思うようになったきっかけにしても、Aさんの自己のとらえの背景には常に「母」の存在が見え隠れしている。しかし、ピア・サポートを通じたさまざまな出会いの過程を経て、Aさんは次のように語っている。

不本意入学と思ったとき、思ってしまったときに、僕に足りなかったのは、「母親への説明」だったんだなあと。母親が「不本意入学」って思っていたり、まあ、今でも思ってると思うんですけど、泣いてるのをみてしまって、そう（不本意入学だと僕も）思ってたんじゃないかって。だから、ピアサポって「人の役に立ちたい」って思って、それも母親発信だったんですけど、でも思ったのは嘘じゃなくて、だけど続けていくうちに結果、僕のためでもあったってやつです。

7. 考察

Aさんの語りは、自己の経験が時間の経過を伴った語りであり、構造的な整理がなされている。そしてその都度、自身の語りの意味、「なぜそのようなことを語ったのか」を反芻しながら新たな語りを生み出している。

「人の役に立つこと」としてとらえていたピア・サポートを継続するなかで、「結果、僕のためでもあった」ととらえ直され、語り直されたのは、Aさんの語りにおいて重要な点である。そしてこのことは、ピア・サポートを継続するなかで出会うさまざまな他者との場面的なやり取りに着眼しては見出すことのできない観点ではないだろうか。1回ごとにされる他者との対話は、たしかに「人の役にたっていること」と実感し、経験とするには十分な営みである。この場面的な対話を時間的経過を伴った営みとして、すなわち、ストーリーとしてとらえたことで、Aさん自身が「本当の不本意入学の人」ではないことに気づくまでの経験の語りとして理解することができたのである。

一方で、Aさんのような「結果、僕のためでもあった」というこうした気づきが、不本意入学というAさんにとってのつらさの解消につながったように、Aさんとは異なり大学入学後にピア・サポートに取り組む学生においても同等のことが言えるのかという疑問は残る。Aさんと同様の成長や学びを深める大学生も一定の割合で存在すると思われるが、そうした場合、両者の違いはどこにあるのだろうか。第7回目の面接調査（第1回目から約4年後）でAさんは次のように語っている。

中にはいるかもしれないんですけど、ピアサポって最初から「自分のためにやろう！」って始める人ってあんまりいないと思うんですよ。やっぱり「誰かの役に立ちたい」みたいなところからだと思うんですよ。とすると、入学後からピアサポやるとどうしても（活動が）うまくいかなかったとき「どうすればみんなの役に立つか」を考え始めてしまって、なんというか「焦り」みたいなものが出てくると思うんです。思うというか、実際、僕も経験あるんですけど。でも僕みたいに高校のときに少しでも（活動を）やっているってことは、あるいは、（活動を）やるまではなくてもピアサポを知っておくということは、それだけ長く（活動を）やっているわけで、「うまくいくときもあれば、いかないときもある」ことを身をもって知ってるんですね。だから、焦りはしないんですよ。…「そんなときもある」くらいで、とりあえず続けてみるのが第一で、結果、僕で言えば「自分のためでもあった」って気づきにもつながったわけですからね。…もちろん、入学してからピアサポやったとしてもその気づきが得られるとは思いますが、どうかな、時間はかかると思うんですよ。だって「人の役に立ちたい」というところから思考がスタートしてるから、役に立つ方法にばっかりに気を取られてしまうんじゃないかな。

Aさんはこのように、大学入学後からピア・サポートに取り組んだとしても「自分のためでもあった」ことに気づく者がいると語ってはいるものの、あわせて「時間はかかる」とも続けている。それは、多くの人々が「人の役に立つこと」を主目的に据えて活動を始めていることで、活動の評価基準もそれに準拠せざるを得ないからとしている。「自分のため」という気づきは、「人の役に立ちたい」、しかし、実際にはうまく役に立

てていると思えないという心境を反復する過程で生じる「焦り」を乗り越えられるほど時間をかけたときに、なされた他者との関わりの中かで得られる気づきであるという A さんの語りは非常に重要である。

以上のように、ピア・サポートを継続している A さんの語りからは、A さんがピア・サポートを通して出会う他者との関わり合いの中かで徐々につらさの根幹である不本意入学をとらえ直し、自己を受け容れながら、すごしていることが明らかとなった。目にみえるかたちでつらさを構成してはいないが、かといって、不本意入学をとらえ直すだけでも十分ではないというとらえどころのない葛藤を、A さんは長年にわたって体験していたといえるだろう。そしてこのことは、A さんの語りを場面としてとらえ聴き取るのではなく、ストーリーとして聴き取り、考察していくことで達成されるものである。

8. 結語

それにしても、A さんはなぜこれほどまでに母親によって行動を規定されていたのだろうか。A さんがピア・サポートを通しておこなっていたこととは結局のところどういった営みであったのかを明らかにすることで解明の糸口を見つけることができると思われる。最後に言及したい。

端的に言えば、彼は不本意入学というつらさを抱えている自分自身に折り合いをつける方法を探索しながらすごしており、しかしそれは、ピア・サポート活動を継続したことで、そうして頑張っている自分が「人の役に立つこと」をすることで、「自分のためでもあった」という気づきにもつながったのである。

では、これらはなぜ自覚的に達成されないのか。それは、つらさに折り合いをつけるということは、すなわち、自己演出と他者の反応との連関がみられることである。しかし、自己演出と他者の反応との間に齟齬が生じたとき一層つらさを覚えてしまうのである。A さんのこれまでの生活における他者の反応とは、せいぜい母親の反応と置き換えられていた。換言すれば、不本意入学というつらさに折り合いをつけようとなされる A さん自身の演出（例えば、橋の研究を楽しそうに母親に語る等）と、それを聞いている、あるいは、聞いたあとの母親の反応との間には齟齬をきたしていたということである。そして A さんは、この折り合いのつけかたしか知らず、大学入学当初から大学 1 年生の終わりまではそうやってすごしてきたのである。しかし、大学 2 年生になってからの彼の体験には、成長とともに顕在化したさまざまな規範がより直接的に影響を及ぼすようになってきたため、これまでとは異なる折り合いをつける方法を新たに身につけたのである。その折り合いをつける方法をピア・サポートを継続するなかで見出していったと考えられる。

A さんの語りをストーリーとして時間的経過をともしたとき、大学でのピア・サポートが自己の受容にかかわる取り組みとして読み解くことができよう。特に母親によって行動を規定されていた A さんにとって、自己を受容することに戸惑いを覚える場合が

多かったと考えられる。「橋の研究をしたい」と考えて B 大学への進学を決意した自己と、一方で、母親からはその進学を泣かれてしまい自身も不本意入学と思い込んでしまっていたこととの間でひどく揺れ動く不安定さが彼には内在していたと思われる。しかし、大学 2 年生になってピア・サポートに取り組むようになった彼は、活動を継続する過程で、母親の持っている不本意入学のとらえとはまた異なるとらえをするようになり、いわば、母親の価値判断と距離を取ることができる環境を手に入れたのである。そこでは、揺れる自己像や不本意入学というつらさを抱えている自分と似た他者に触れ、ひとりで頑張ろうと無理をしてしまうことを A さんはやめたのだ。そうした、ピア・サポートを通じて他の学生たちの他者性に触れていくことは、自己の受容にとって大切なことではないかと考える。自身と社会のありようとの間で折り合いをつけていくためには、自分と似た他者の存在が不可欠であり、ここにつらさを抱えながら生活している大学生を理解するための臨床教育学的研究の意義もあるように思われる。

《参考引用文献》

- ¹ 日本ピア・サポート学会. “ピア・サポートの定義.” 日本ピア・サポート学会. <http://www.peer-s.jp/idea.html>, (参照 2025-07-11)
- ² 独立行政法人日本学生支援機構. “大学等における学生支援の取組状況に関する調査 (令和 3 年度 (2021 年度)). ” 独立行政法人日本学生支援機構. 2023-01. https://www.jasso.go.jp/statistics/gakusei_torikumi/2021.html, (参照 2025-05-31)
- ³ 吉森丹衣子 (2016) 「大学生の自己肯定感における対人関係の影響 : コミュニケーションを重視して」『国際経営・文化研究』(21). pp. 179-188.
- ⁴ 佐藤進・鈴木貴士・川尻達也・山口真史 (2016) 「入学時に大学に対する不本意感および学業へのつまずき感を有する学生の特徴」『工学教育研究;KIT progress』(24). pp. 53-62.
- ⁵ 山上翔平 (2020) 「青年期の親子関係が大学適応感に及ぼす影響の検討」『追手門学院大学心理学論集』(28). pp. 1-6.
- ⁶ 窪田容子 (2000) 「母親と息子の関係—フェミニズムの視点から考える」『女性ライフサイクル研究』(10). pp. 47-60.
- ⁷ 伊藤智樹 (2008) 「語り手に『なっていく』ということ」崎山治男編『〈支援〉の社会学——現場に向き合う思考』青弓社. pp. 21-39.
- ⁸ Frank, Arthur W. (1995) *The Wounded Storyteller: Body, Illness, and Ethics*, The University of Chicago Press. (=2002, 鈴木智之訳『傷ついた物語の語り手——身体・病い・倫理』ゆみる出版.)
- ⁹ 井上俊 (1996) 「物語としての人生」井上俊・上野千鶴子・大澤真幸・見田宗介・吉見俊哉編『岩波講座現代社会学 9 ライフコースの社会学』岩波書店.